

## Negative Rugby からの脱皮

スピード攻撃を目指している日本代表チームの成績が芳しくない。これは代表選手だけの問題ではありません。彼等が育った日本のラグビー全体の展開継続・スピードに対する感覚と目標意識のレベルに問題があると言わざるをえません。

日本ラグビー再生普及への道として、running handling game であるという本質を弁え、展開継続のレベルアップが必須要件であることを理解することがまず必要です。これらの面は確かに改善されつつありますが、それを更に加速するためには negative rugby から脱却して、もっとももっと多くの人に興味を持ってもらい、ラグビーを楽しみたいという多くの人のニーズに応えるという課題に挑戦しなければなりません。

NEGATIVE RUGBY=否定的ラグビーとはどんなラグビーを指すのかということから始めましょう。この言葉は、大分前の事になりますが、日本が初めてメジャー国スコットランドに勝った試合で、イングランドのラグビー機関誌ラグビーワールドに「日本は negative rugby で勝った」と批評されたのが始まりです。

メジャーに初めて勝って、日本ラグビー界では大喜びと同時に、指導者の間で negative という言葉の意味と、内容の分析がなされ、外国への反論もなされました。当時の日本の指導者たちの感想は、否定的という言葉にはあたらないというのが結論でした。敗者の負け惜しみではないかという意見もありました。現状肯定論が始めて、意図的に反志向性プレーがなされていないということでした。

とはいえ、negative という批判は望ましくない事は間違いのないところで、少なくとも程度の差があるにしても negative という言葉を彼等が使ったということは、反省の材料に値するものでした。それ以来、ルールは大きく改定され、継続・スピードのレベルが格段に進歩している今日、未だに negative と評された時代の遺物を引きずっている現状改善の必要性を痛感します。

『FWのボールを展開して game making を計らなかつた』を始め、海外からの指摘を土台に、プレーについて具体的に相手側プレーと対比して議論されたことは次のような点でした。

1. 『身体の小さい者が何も考えずに直進体当たりする』という点  
「獲得したボールは、第一にパス、それから展開という作戦はわかっているが、敏捷性を生かして確実性をとるためには、近いところで前に出ることも必要で、外国人には無謀とみられたのだろう」
2. 『ボールを持って走って捕まったら、素早く地上に横たわる。立っていてプレーを続けようとしなさい』という点  
「身体の小さい日本人のプレーとしては当然なことで、腕の永い外国人に対しては立っていると不利である。展開する意志がないのではない」
3. 『タックルされたら、地上に横たわり、ボールを胴体と腕で抱え込んでいる』という点  
「展開をさまたげているといえはそうであるが、相手ボールにならないようにするには、更にその上に折り重なるようにするのが有利と考えた」
4. 『スクラムを非常に低く組む。(時にはそれが崩れる原因になる)』という点  
「身体の大きい外国人は、組みつらかつたのだろう」

下から上へ押すことが有利なのは間違いのないところですが、外国では地面と並行に押すのが普通で、この件には反省もありました。相手に上から大きな力をかけられると、疲労も大きく、展開力低下のマイナスもある。

5. 『セービングでボールを抱え込んだ』という点

falling on the ball をセービングと言ってよく練習されました。ボールに飛び込む行為も、身体の大きい人からみれば展開否定に見えたでしょう。ピンチを救う必死のプレーだったのですが、立ち上がりが遅かったことは反省しなければなりませんし、責められても仕方のないところです。

このように列挙してみると negative rugby は過去の問題ではなく、今日の問題としてとりあげて議論し、negativeと批評されても致し方ないようなプレーの否定から、否定的と言われないラグビーを推進していくことが、ラグビーを面白くし、世界レベルに追いつく筋道であることが理解できます。

総括的に、否定的という場合に対象となる要素は主に3つあげられます。

1. ラグビー精神に対して否定的

ルールを守り、フェアに点をとって楽しもうという精神に反するもの。  
ラインアウトでボールを持っていない相手のジャージを捕まえるのを jersey puller として非難されたことがありました。

2. ルール・ルールの意思に対して否定的

ルールはラグビーを楽しむために人間がつくったものであり、この意思に反するもの。目的達成のために方針を打ち出す。これをルールの意思（規定の意図）と言っていますが、確認しましょう。

- (1) 公平・平等でフェアに戦う
- (2) オープン展開継続するように戦う
- (3) 事故防止して安全に戦う

3. レフリーの権威に対して否定的

反則が多いのは、勝つことだけ意識し反則を少なくしようという意思が希薄なこと。反則をとられても平気（言い過ぎかもしれないが）な様子で反省がみられない。レフリングに対する不満を残した様子さえみられる。その結果、チームとしての反省改善もなく、反則の繰り返しがあります。

1試合ペナルティーが20以上という試合も希ではなく、両チームで40以上という、スポーツマンとしての資格がないといわれても仕方がない試合もあるのです。

議論するだけでは進歩はありません。negative rugby の反省と改善は、日本ラグビーの将来にも係わる重大事ですから、根本的対策を考えなくてはなりません。ラグビーの歴史やプレーとルールの研究から、ラグビーの本質を勉強し、否定的ラグビーを否定する意識の改革がまず大切です。意識の改革がなされたならば、事は半分成ったといえるでしょう。ルールの研究は、LAW 1,7,8 条を始めとして15条も根本的に勉強しなければならないでしょう。ラック・モールルのルールの正しい理解も必要です。ルールを正しく守る、即ち、ルール制定の意図（目的）が達成されて初めてルールが守られたといえるのです。

実戦的対策として、反則者は笛に対して「私です」と手を上げる（バレーボールのように）というのも一つの方策です。審判のいないゴルフの申告制は、競技の本質に係わる制度で、その精神は学ぶべきものがあります。ラグビーについても本質の理解と体得はプレーヤーとして欠かせないことなのです。意識が高まれば道は開けるものです。

### 結びとして

今、改めて negative rugby をとりあげたのは、未だ negative 風が残存していると言わざるを得ない現状に対する見直しの必要性を感じるからです。スピードと継続のレベルがどんどん上がっている世界の実情から、日本のラグビーが目指しているレベルは一周遅れで先頭争いの感があるのは、根本的に negative rugby から脱却していないからだと言っても過言ではないと思います。